



2015年度 国際交流事業：国際シンポジウム
【討論者および参加者とのディスカッション】

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊田, 久美子, 田間, 泰子, 浅井, 美智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/14918

【討論者および参加者とのディスカッション】

討論者：伊田久美子、田間泰子、浅井美智子

伊田

まずテショメさんにご質問します。お話から、活動しておられるアカキでは、家父長制と貧困により、女性が脆弱な状況に置かれていることがわかりました。それに対して女性が経済的に力をつけていくことが大事であると感じました。この地域に資本主義経済がどれくらい浸透してきているのかに関心を持ったのですが、今日のお話である程度知ることができました。

お話から女性性器切除の割礼師である女性が尊敬をうけ、経済的な報酬も受けているということをお話しましたが、その技術がどのように受け継がれてきたのか、この女性たちは共同体の中でどのような存在なのか、彼女たちもまた家父長制的な家族に所属しているのか、割礼師をやめて農業に戻るといいますが、それによって彼女たちの地位がどのように変化するかをお話しいただけないでしょうか？ また割礼師は出産にも関わるのでしょうか？

次にホラさんのご報告について質問です。ホラさんのお話は、まさに女性のエンパワーに経済力が重要であることを示していますが、彼女らが得た利益は伝統的家父長制な家族に回収されてしまうのでしょうか？ それとも個人として保持することができるのでしょうか？ たとえばバングラデシュのグラミン銀行やインドのSEWAのように、女性だけが金を借りることができるという制度が世帯内の女性の地位を大いに変化させる効果がありますが、この組合活動ではどのように運用されていますか？

また土地の私有化が、この牧畜民社会で進んでいるのでしょうか、それとも共同体として権利が分配されるということなのでしょうか？ 資本主

義化との関わりにおいて興味深いので、お教えいただきたいと思います。

田間

私は家族社会学、リプロダクションとジェンダーを研究しています。有斐閣から出版したテキストで、合計特殊出生率と労働力率、高等教育進学率のグラフを国際比較し、その中にたまたまエチオピアのデータを入れていました。なぜエチオピアに注目したかといいますと、日本と対照的だったからです。日本は世界の中で人口中の子どもの比率が最も少ない国です。それに対してエチオピアは、世界で最も子どもの比率が多い国でした。スクリーンにお示ししているグラフは合計特殊出生率がX軸で、日本とエチオピアは非常に違う状況にあります。ところがジェンダー・ギャップ指数という、男性と女性の間にとれほどの違いがあるかという指数では、日本は104位で、エチオピアは127位です。学生は、日本は豊かなのに、どうしてエチオピアとそれほど変わらないのかと疑問に思うわけです。けれども今日の4人の方のお話をお聞きして、私はすごく納得しました。

日本がなぜこれほど低いかというと、一つは、女性の経済力が低いからです。もう一つは政治力、意思決定の参画が低いからです。先進国の中では最低です。今日ティグラ州やホラさんのお話をお聞きすると、教育や経済力、政治への参画の仕方で、草の根から掘り起こして女性の平等を確保するという試みをしておられます。そこから学ぶことが日本にとってたくさんあると思いました。

質問は三つあります。一つ目は、誘拐婚と早期婚についてです。これらは法律で禁止されているのかという点です。二つ目は、統合的アプローチによる支援で、家族計画、つまり子どもをどれほど産むか、いつ産むかなどについての計画について、リプロダクティブ・ライツがどのように変化したのか、それが女性のエンパワーメントと地位変化に、どのように関連しているのかという点です。最後の質問は、NGOについてです。NGOに対する厳しい規制があるにもかかわらず、草の根ですばらしい活動をしておられ、日本が学ばねばならないところがあると思います。それぞれのお立場から、NGOがなぜ社会に必要なか、何が果たす役割なのかということ

をお聞きしたいと思います。

浅井

私は出産に関する先端生殖医療の研究をしています。私は眞城さんの発表にコメントしたいと思います。生活に根差したNGOの活動を見ましたとき、女性の力の大きさを感じました。東日本大震災の復興で女性の果たした役割が大きかったことが知られていますが、内戦下の女性たちと復興に向かうときの女性たちの役割が私の中でだぶって見えました。

さて、二つおたずねしたいことがあります。人民解放戦線には女性もいたということですが、終戦後も、男女平等という意識を、とくに男性たちが持ちえたのかという点をお聞きしたいと思います。反政府運動を支えた学生たちについてですが、学生たちはどのような教育を受けていたのかということについておうかがいしたいです。次にテシヨメさんのところの話ですが、女性がフィスチュラという身体的な障害をもつということをお話されましたが、幼い時に出産をするので胎児の頭が膣にはまってしまって三～四日も出産状況におかれることがあります。それで膣に穴があいて、尿道あるいは大腸とのあいだに穴があき、常時尿や便が出てしまうようになります。フィスチュラになると、身体的な問題だけでなく、社会的な差別の対象にもなります。今では手術で治すこともできると思いますが、エチオピアでは状況はどのようなになっているのでしょうか？ また出産における女性の身体の侵襲がどうなっているのかということをお聞きしたいと思います。

テシヨメ

ご質問ありがとうございます。クリティカルでアカデミックな質問でした。政府の統計は怪しいので、社会運動家としてお答えしたいと思います。

割礼師についてですが、彼女たちはコミュニティの中でも尊敬されており、そのために声をあげて女性たちを説得できるような立場にもいます。割礼だけでなく、伝統的な治療者でもあり、助産士でもあります。ユニセフから清潔な手袋をあたえられ、訓練を受けて出産に立ち会ったりもして

います。健康増進運動などにも関わっています。割礼師の技術は母や姉妹によって継承され、割礼をしても痛くないようにしたり、早く癒すような技術を持っていると言われていました。そのために割礼師は情報を与えるのに重要な立場にあると言えます。私たちはいろいろな活動に割礼師を呼んでいます。私たちは割礼師と対立するのではなく、その技術を尊敬したうえで、色々な交渉をしてもらい、伝統的なものを変化させるように促しているのです。女性性器切除だけでなく、HIVなどのタイムリーな問題にも関わってもらうようにしています。

経済的な点については、割礼師は割礼をするかわりに、尊敬を受け、お金をもらっていました。割礼を廃絶すると、その両方とも失うことになりまますので、そのようにならないように、割礼師で自助グループを立ち上げて、その中で収入を得ることができるようになりました。代替的なトレーニングを受けたりとか、事業を始めるための資金を貸したりして、割礼師が仕事を失わないような活動に取り組んでいます。

シングルマザーのサポートは二種類あります。一つは早期の妊娠についてで、18歳までに妊娠している人がたくさんいます。そこで学生で妊娠している人をサポートしています。もう一つは、早期婚から逃げ出せるようなサポートです。オロミアでは結婚するのが7歳、8歳ということもあります。すると13歳や14歳で子供を産むことになります。毎年子供を産むので、18歳で3～4人の子供を持つこともあります。そのあとに離婚することもあり、また夫が死ぬと夫の兄弟が妻を相続するという慣習があります。そのような状態にある女性たちをサポートするために、自助グループをつくったり、事業を始めるための資金を提供したりしています。

ホラ

お金についてですが、女性組合で稼いだお金は、法律では女性たちのものですし、ホールの中でも男性たちが女性の活動をいやがってお金を取るうとしたこともあるのですが、取り上げられることなく、自分たちのものとして確保できています。

土地の私有化については、エチオピアでは土地は政府のもので、私有化

はできません。しかし実際には使用権が売買されています。けれどもホールではまだ、土地は共同で分配されています。周辺には中央の資本家が土地を買って農場をつくっているのですが、まだホールにはそのようなものは来ていないということです。

女性組合のお金を借りることができるのは基本的には女性ですが、男性でも、子どもが病院に行かねばならないというような事情があり、もしちゃんと返すのであれば、借りることができます。

眞城

田間先生のご質問にお答えします。まず早期婚がどれくらい続いているかについてです。現政権になってからは早期婚の禁止が15歳から18歳に上がったのですが、厳しい罰則規定はなく、2011年の政府報告によれば、ティグライ州でも43%が18歳までに結婚しているということになっています。女性の政治家が、今年4000人の早期婚を防いだというようなことをアピールしていますので、まだまだ早期婚は行われているということがわかります。

次に家族計画についてですが、家庭内での夫婦間の関係については、農村では男性側の意識が変わったとはいえないと思います。アフリカではHIVの感染率が女性の方が高いのですが、ティグライでも同様な現実があります。家庭内でHIVの感染者が出た場合は、たいていは男性が持ち込むことが多いのですが、女性が持ち込んだと言われます。そして女性が家から追い出され、路上で生活するような状況が、いまだにティグライでも見られます。そのような女性への支援も行われています。

女性が経済力を身につけることで発言権を持つということは、都会では少しずつ見られるようになっていますが、農村の中では女性が経済力を持ったということはないと思います。ただ寡婦になっても土地をもらえるという、最低限生きていくためのセイフティネットはつくられており、そのような下支えのエンパワーメントをしているという状況です。完全に男女が平等になるという大きな目標は、まだまだ先の話という状況です。

次にNGOの役割についてお答えします。私が報告したのは政府系NGO

についてなのですが、それならばなぜ政府自身がやらないのかということですね。それは政府のキャパシティは限られていますし、女性省は現政権になってからつくられたもので、まだまだ規模が小さい省庁で、人材も足りず、プログラムも回せない状況だからです。ですからテシヨメさんのところもホラさんのところもそうですが、アフリカではローカルNGOが底辺を支える社会福祉の担い手のような役割を期待されています。ティグライ州のように資金や政治力があっても、NGOというのは外部資源の獲得アクターとしても重要だし、草の根アクターとして行政の補完をする役割もとても重要だと思います。

浅井先生のご質問については、かなり政治的な話をしなくてはなりません。なぜ反政府勢力の学生が女性解放をとらえたのかというご質問でした。エチオピアでは60年代からアメリカにもヨーロッパにも東欧にも中東にも留学生を出しているのですが、東欧に留学した学生がマルクス・レーニン主義をエチオピアに持ち込み、それをもとに60年代70年代にエチオピアの首都で、エチオピアの知識人・学生における民族解放・階級解放、そして最後に女性解放という思想が持ち込まれました。それを根付かせる活動が、内戦下のティグライでも行われていたということだと思います。

フィスチュラの話ですが、ティグライでも州都以外では十分な医療施設があるとは言い難い状況です。ティグライ州全域でも病院は14しかありません。これは34万人に1病院です。ヘルス・ポストに行くのにも、20キロ以上歩いていかなければならない人が、13パーセントもいるそうです。これが問題だとは言われているのですが、それをカバーするだけの人材も医療施設もまだまだ足りていないというのが現状です。差別や医療施設が足りないというのは認識されていますので、Women's Associationでそれに特化したプログラムが立てられていますし、これはティグライだけでなくエチオピア全域でそのような取り組みがなされています。

参加者

私はケニアで女性性器切除の調査をしています。エチオピアではケニアよりもだいぶ早く禁止法がなされていると思うのですが、実際にどのよう

な罰則がなされているのかという点をおたずねしたいと思います。またケニアでは禁止法によって女性性器切除がどんどん秘密に行われるようになっていっていますが、エチオピアではどのようになっているのでしょうか？ 女性自身が割礼を受けたいと思っている人もケニアにはたくさんいるし、受けないことでスティグマを与えられることもあると思うのですが、テシヨメさんのお嬢さんたちは結婚するにあたって不都合があるとか、外部の人としか結婚できないというようなことはありませんでしたか？

テシヨメ

エチオピアはアフリカでも最も女性性器切除の行われている地域です。70～80パーセントの女性が女性性器切除を受けています。娘に性器切除を受けさせるようにするのは親です。もちろんそれを禁ずる法律があります。けれどもそれで罰せられた例は少なく、だれもわざわざそれを裁判所に訴え出たりはしないのです。刑務所に入れられるケースもありますが、アカキでは今まで2ケースしかありませんでした。少女がそれを「母親のフォーラム」に訴え、そこから警察に通報されるのですが、20キロも歩いて訴えに行かないといけないので、誰もそのようなことはしようとしません。具体的な罰則としては、3か月から1年の懲役があります。

ホラ

私たちの社会では、女性性器切除はずっと昔から行われてきたものです。ところが政府がそれを禁止しようとしてきました。他方で女性たちはそれを続けたいと思っていました。私はホールで長老や女性たちを集めて話し合う機会を持つようしました。ホールの女性性器切除は、結婚のときにもととは全体を切り取るものでしたが、その後クリトリスの先端だけを切除するものになっていました。しかし政府はそれに介入し、結婚後の女性に女性性器切除が行われていないかどうか、性器を検査しようとしてきました。人々はそれに怒り、銃を発砲して抗議をしたのです。私は重要なのは教育だと思っています。力ではなく、教育を通して、女性たちの考えを変

えていくことができるのだと思っています。